

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11860

研究課題名(和文) ダークツーリズムを援用した災害記憶ならびに復興記憶の継承手法確立

研究課題名(英文) Establishing a method for passing on disaster and recovery memories using dark tourism

研究代表者

高木 亨 (TAKAGI, Akira)

熊本学園大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：20329014

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人類の悲劇とともに復旧・復興の経験について、その継承手法を開発することを目的とした。そのためにダークツーリズムの考え方を援用した。まず、東日本大震災での継承活動と観光との関係について検討した。次に、満洲やアウシュビッツなど戦争関係での継承のあり方について明らかにした。

時間の経過により当事者による継承が難しくなるなか、次世代による継承やダークツーリズムによる追体験で、その悲劇を自分事として捉える仕組みが必要である。そのためには、過去の出来事は、「日常」が悲劇により奪われたとの認識が必要である。この認識をもとに日常を視点として考えることが、悲劇の継承に大きく役立つことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当事者や第三者による悲劇の継承について検討する事ができた。加えて、悲劇の場所を訪れ、その場に立ち悲劇の出来事を振り返る際に、当事者の存在がより印象深く残ることが、東日本大震災の被災地、満洲開拓団の入植地への訪問を通じて明らかにすることができた。また、時間の経過とともに当事者が鬼籍に入る中、アウシュビッツでの日本人ガイドによる「ガイド」は、今後の継承について示唆に富むものであった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a method to pass on the experience of recovery and reconstruction along with human tragedy. For this purpose, we applied the concept of dark tourism. First, we examined the relationship between the inheritance activities of the Great East Japan Earthquake and tourism. Next, I clarified the way of inheritance in war-related areas such as Manchuria and Auschwitz.

As the passage of time makes it difficult for the people involved to pass on the tragedy, it is necessary to create a system that allows the next generation to pass on the tragedy and relive it through dark tourism. In order to do so, it is necessary to recognize that the past events are the tragedies that took away our "everyday life. Based on this recognition, it became clear that thinking about everyday life as a point of view would be of great help in passing on the tragedy.

研究分野：人文地理学、復興研究、ダークツーリズム

キーワード：継承 ダークツーリズム 「悲劇」 東日本大震災 満蒙開拓 アウシュビッツ 当事者 災害記憶

1. 研究開始当初の背景

これまで福島県を中心に東日本大震災および原子力災害からの地域復興について研究を進めてきた。また、2016年の熊本地震に遭遇する中、東日本大震災と熊本地震との報道量の差異などが気になった。災害規模の違いがあるが、熊本地震に関する報道量の減少は早く、また風化についても進んでいると感じていた。同じく研究開始時に東日本大震災発災から6年経過しており、熊本など被災地から離れた場所ではすでに風化が進んでいる状況であった。

また、研究の視点としては、災害初期のサバイバル的な一次被害は、研究や教訓として蓄積が多くみられ、記憶や教訓の継承としてはポピュラーであった。その一方、復興へと至るプロセスで社会的なセーフティーネットから漏れ落ちたり、風評被害等により多くの人々が命を落としている二次被害については記憶や教訓の継承ができていないとの問題意識があった。

こうした背景のもと、過去の災害等の教訓を後世に伝える、また、同じ悲劇を繰り返さないためにその記憶を継承するためには、通常のやり方に加え、新たな手法の開発が必要ではないかとの結論を得た。その際、新たな手法の手がかりとなったのがダークツーリズムであった。ダークツーリズムは、人類の悲劇の地を訪れる旅のあり方の概念である。この概念は1990年代にイギリスで定義がなされ、日本には研究分担者の井出によって導入された。人類の悲劇の地(戦跡や虐殺の地)などを訪れ、その悲しみや死者と向き合い、死者を悼む旅は、人びとの「興味」から悲劇と出会い、その記憶を旅人に深く刻むものである。欧米では主に戦争にまつわる悲劇の地がその訪問先となるが、自然災害の多い日本では、被災地も訪問先となる。

日本におけるこうした観光行動は、被災直後には被災者など当事者に嫌悪され、非難されるものである。また、「ダーク」という日本語の意味合いから忌避されることも多い。当事者の心情としてこれらの反応は理解できることである。しかし、時間の経過とともにその悲劇が風化するにつれ、ダークツーリズムにより風化の歯止めとなり、風化を遅らせることができる。東日本大震災被災地においても、復興プロセスにおいて、被災地への交流人口増に大きく寄与できる。加えて被災地と向き合う「観光客」を増やすことは、結果としてその悲劇と向き合うこととなり、その記憶・教訓の継承に役立つものと考えた。また、従来の教育・学習旅行とは異なり、旅人の主体性(興味)から観光行動をおこす観光形態である事も、継承のツールとして有効であると考えた。

そこで、震災復興研究とダークツーリズム研究を連携させることで、新たな観光学の視点と災害の記憶の継承という役割を持たせることができると考え、本研究を進めることとなった。

2. 研究の目的

東日本大震災発災からの時間が過ぎていく中で記憶の継承の難しさが語られることが多くなってきた。このため東日本大震災の様々な教訓を次の世代へとつなげるための記憶継承の手法を明らかにすることを目的とした。このため東日本大震災以前の「悲劇」における記憶や教訓の継承を学び直すと共に、「悲劇の地」を訪問するダークツーリズムを援用することで、記憶継承手法のパッケージ化をすることを目指した。また、復旧・復興の記憶についてもその継承に加えより広義の「悲劇」の継承を含めて新たな継承手法を構築することにある。

3. 研究の方法

本研究は、福島県での東日本大震災からの復興プロセス研究をおこなっている高木と日本でのダークツーリズム研究の第一人者である井出のこれまでの研究がベースとなった。高木は福島の被災地に加え、津波被災地域の宮城・岩手沿岸地域での被災経験の継承に関する調査をおこなった。さらに、過去の「悲劇」の継承について、国策移民であった満蒙開拓団とアウシュビッツ強制収容所での日本人ガイドを対象とした調査を実施、継承研究に加えることができた。一方井出は、東日本大震災をダークツーリズムやアートの視点から、世界遺産についてもダークツーリズムの視点から分析をおこなった。日本では語られにくい「影」の側面を中心に、本来語られなければならないモノに視点を当てる研究をおこなった。

4. 研究成果

1) 東日本大震災での継承の実践と課題

「悲劇」の継承といっても、それぞれの「悲劇」の特徴や「悲劇」の発生からの時間経過などの事情により多様な継承のやり方が存在している。本研究では、多様な継承の形態を明らかにするため、東日本大震災津波被災地のほか、インドネシア・アチェでの津波被災

継承について調査をおこなった。いずれも発災から8~15年の時間が経過している「悲劇」である。一方、「悲劇」の発生から時間が経過した事例として、旧満洲における満蒙開拓団（初に分村移民大日向村）での記憶の継承や、世界遺産にも認定されているアウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所での継承についての調査を実施した。その際、単なる継承の仕組みをさぐるのではなく、ダークツーリズムの視点からツーリズムの観点からも考察をおこなった。

東日本大震災津波被災地の場合、津波被災者または遺族など「当事者」による被災経験等の伝承が盛んにおこなわれていた。宮城県女川町では、震災遺構とは別に、12人が犠牲となっている七十七銀行女川支店被災で長男を失ったT夫妻が、訴訟の経験やそこから得られた企業防災について、現地にて語り部活動をおこなっている。そこには様々な手段で知った人たちがT氏の語りを聞きに訪れている。T氏たちは内陸の大崎市に在住しており、津波に直接被災したわけではない。しかし、女川支店に勤務していた長男を失うという痛ましい経験と、支店長の避難指示により支店背後にある16mを超える高台ではなく、10m足らずの支店屋上への避難し被災した。屋上への避難指示をした七十七銀行を相手に訴訟した経験（結果は最高裁での原告棄却敗訴）をもととした、「当事者」の立場での語りを伝えている。子どもを失った親の思いや、訴訟に踏み入れざるを得なかった心情や誠意のない企業の対応など、津波被災だけでは留まらない震災の被害や理不尽さなど、震災以降過酷な経験のみならず、そこから導き出された企業による防災活動への助言を含む「当事者」だからできる話を伝えている。

同様の取り組みは、女川の北隣、北上川河口近くにある石巻市大川地区にあった旧大川小学校でもおこなわれている。大川小学校では津波被害により教職員・児童あわせて84人が犠牲となった。被災当時は学校管理下にあり、地震発生から30分以上も校庭で待機していたことが分かっている。学校の裏手には日頃から学習活動で利用していた高台があり、そこへ避難していれば助かったと言われている。ここでは、児童を亡くした保護者を中心に語り部活動がおこなわれている。大川伝承の会共同代表のS氏（次女を亡くしている。震災当時は女川中学校の教員）の語りを聴くことができたが、普通の小学校が「悲劇」の舞台になってしまったこと。教育委員会の対応（当時は行政を相手に訴訟中であった、後に勝訴）と教員仲間としての様々な想い。小学校の保存についての状況。そして、避難していれば助かっていたであろう場所と実際に避難したと思われる経路などについて、その場所で伝えている。大川伝承の会では定期的な語り部の会を催しており、関心のある人たちが訪れている。

また、大槌町では震災後に支援で移住し地元に着したK氏（NPO法人おらが大槌夢広場代表理事）による語り部を聴くことができた。大槌町は災害対策本部が置かれた町役場が津波に襲われ、町長以下28人が犠牲となった。役場庁舎は震災遺構として保存か否かに町民は二分されるなど、津波被災とともに震災遺構の保存にとまらぬ町民分断の経験をしている（訪問時、役場庁舎は残存、その後解体された）。当事者ではないK氏ではあるが、冷静な視点で大槌町の被災についての語りがあった（とは言え、震災以後大槌町と関わり続けていることで、ある種の当事者となっている）。当事者からの話を集め、語り部として語る内容には共感するものも多く、第三者による語りのあり方を示すものだと言える。

震災遺構の保存については、訪問した3ヶ所それぞれで異なる状況であった。七十七銀行女川支店は被災後早い時期に撤去されその場所はかさ上げ工事用地となった（女川町としては交番など一部建物の保存がおこなわれている）。このため現在の景観から当時を思い浮かべることが難しい。しかし、T氏たちの資料を用いた現地での語りにより、変わってしまった景観から当時を想像することができる。また、その変容振りに驚く。一方、大川小学校は被災した構造物が残っており（その後、震災遺構として保存が決定）、建物を見ながら佐藤さんの話を聴くことができた。大槌町では市街地全体がかさ上げ工事の対象となり、役場庁舎を除き遺構となるものが存在していなかった。しかし、その役場庁舎をめぐる住民の意見が二分されてしまう結果となった。最終的には庁舎は解体されてしまった。「残す」「残さない」の二択で当初住民アンケートを取ったことが結果的に住民たちを苦しめるという経験をしている。また、訪問だけであったが、宮城県南三陸町の防災庁舎では、宮城県が仲裁役となり30年間の遺構保全を担い、結論を先送りしている。

震災遺構が残っていることは、当時を思い起こすためのきっかけとなる。また、遺構を目指して訪問する人びとの存在は、後の災害からの復興に役立つものだと言える。その一方で遺構を目にすることで苦しむ当事者たちの存在がある。遺構保存をめぐる議論に正解はないといえるが、少なくとも大槌町のように住民を二分するようなことは、避けなくてはならない。長期的な視点に立った判断が求められるが、そのためにはある程度の時間が必要である。

ツーリズムの観点から考えると、遺構は魅力的なコンテンツとなる。遺構には悲劇的な物語が存在し、そこに語り部の語り加わること、人びとを引きつける力となる。遺構に人が集まり、そこでの出来事に関心を寄せることで、悲劇の継承につながりやすい。その一方、被災から日が浅い段階では、悲劇に関心の薄い「観光客」の当事者たちの心情に沿わない行動により、コンフリクトを生むこともある。それでも、被災地への関心を維持し、そこでの出来事を後世に伝える意味において、震災遺構と語り部とのセットは大きな役割

を果たすと言える。

一方、語り部のみの活動の場合、当事者のインパクトのある語りがあるうちは、興味関心を寄せる人びとを引きつけ、記憶の継承につながるものと思われる。しかし、時間の経過とともに当事者の存在が少なくなっていくと、遺構という「形」がない分、記憶の継承が厳しくなるかもしれない。この際に、どのように記憶を継承していけば良いのであろうか。また、当事者の語りが人びとを引きつけるアイコンとなっていた場合、そのアイコンが失われることで、被災地への訪問者が減ってしまうことも想定できる。「形」に変わる何かを見いだす事ができるのであろうか。

2) 「悲劇」から時間が経過した記憶の継承

継承者という視点に立って、別の角度から継承について考えてみる。悲劇の発生から時間が経過し当事者が不在となった場合、誰が悲劇の経験・記憶の継承を担うのか。二つの事例を元に検討を進めた。一つは旧満洲開拓団の一つである旧満洲大日向村開拓団訪中団ツアー（舒蘭会友好訪中団）の取り組みである。もう一つはアウシュビッツ強制収容所にて唯一の日本人ガイドとしてガイドをおこなっているN氏の事例である。まずは、大日向村開拓団訪中ツアーからみていく。

①旧満洲大日向村訪中団ツアー（舒蘭会友好訪中団）

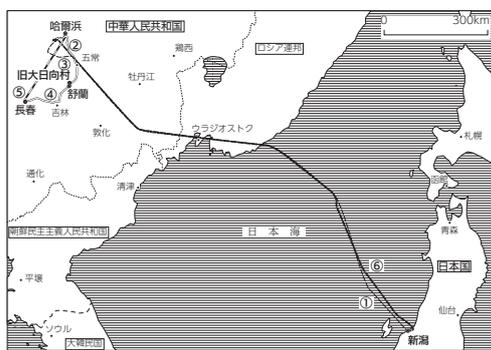


図1 舒蘭会行程図（2019年5月27日～31日）

- ① 5月27日：新潟→哈爾濱→舒蘭
- ② 5月28日：旧満洲大日向村訪問
- ③ 5月29日：舒蘭→長春（旧新京）
偽満皇宮博物院見学
旧陸軍官舎跡・長春公園（旧緑苑）訪問
- ④ 5月30日：長春→哈爾濱
日軍七三一部隊罪証陳列館見学・松花江・哈爾濱中心部散策
- ⑤ 5月31日：哈爾濱→新潟

舒蘭会友好訪中団（以下、舒蘭会）は、旧満洲大日向村の開拓二世が中心となり組織された、訪問ツアーである。2019年5月27日～31日にかけて企画された。おもな訪問地は、旧満洲大日向村1～5部落、敗戦後約9ヶ月間抑留され団員の半数が死亡した長春（旧新京）の開拓団ゆかりの場所の他、長春での偽満皇宮博物院や哈爾濱での侵華日軍七三一部隊罪証陳列館など大日本帝国時代の旧満洲統治に関わる施設も含めたものであった（図1）。

ツアーは敗戦後、再入植した軽井沢町大日向地区の開拓二世（戦後生まれ）のA氏が中心となり、開拓二世（当時小学生）を団長にして、母村の佐久穂町大日向の人たちを含めて組織された。さらに、長年にわたり開拓団の資料関係の整理をおこなっていた佐久穂町のB氏（支援者）、研究者、大日向村の歴史を取材してきたマスコミ関係者という「関係者」が参加した。

また、興味ある一般の人にも開放し、旧満洲大日向村と満蒙開拓を考えるツアーとして企画された。このため、関係者が居住していた場所を訪れるだけでなく、哈爾濱・長春（旧新京）を含めた旧満洲（偽満洲）での侵略について俯瞰する内容となった。

企画者は意図していたわけではないが、結果としてダークツーリズムの要素が加わったツアーとなった。このため、単なる「悲劇」の開拓団というだけではなく、当時の植民地政策という国策の中に組み込まれてしまった開拓団の姿や、敗戦により大日本帝国から切り捨てられた開拓団の姿が鮮明となるツアーになった。

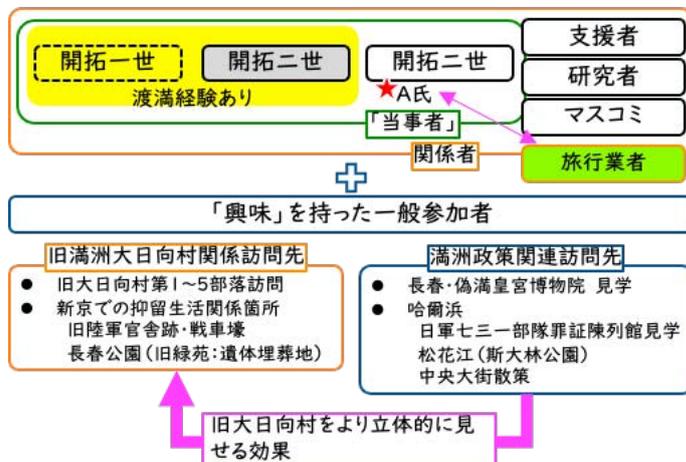


図2 舒蘭会ツアーの構造

特別な過去の出来事ではなく、現在までもつながっていることを、当事者の世代交代によって結果的に実感できるものとなった。

このツアーにおいて、当時率先して満洲へ渡った世代（開拓一世：当事者）はおらず、当時子どもとして親世代（開拓一世）と共に満洲へ渡った開拓二世が経験者であった。一方、ツアーの中心はA氏のように戦後引き揚げてから生まれた渡満経験の無い開拓二世であった。渡満経験が無いとは言え、開拓一世の親やその世代から満洲の経験は聞いており、次の継承者としての役割を担うようになってきた。こうした「次世代」の当事者（継承者）を「関係者」が支えていくことが、当事者が失われつつある中での一つの方策だと言える。また、過去の悲劇は

②アウシュビッツ強制収容所公式ガイドN氏のスタンス

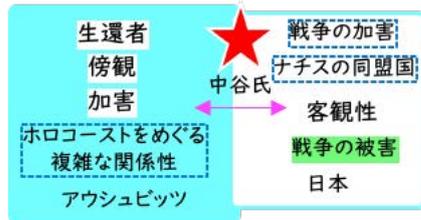


図3 中谷氏によるガイドの役割

アウシュビッツ強制収容所で日本人唯一の公式ガイドとして日本語によるガイドをおこなっているN氏へのインタビューを2020年2月に実施した。あわせてN氏による収容所ガイドにも参加した。N氏は、当事者ではない。かつドイツやポーランド、ユダヤに由来する人でもない。第三者ではあるが、アウシュビッツ強制収容所で起きた出来事に触れ、ガイドとして「伝える」ことを仕事としている。第三者によるガイドを通じた継承とすることができる。

N氏によるガイドは、当事者による語りとは大きく異なる部分がある。得てして感情的になりやすいところをおさえ、起きた出来事を冷静に訪問者に伝える点である。N氏の役割は、訪問者に対して、「外国人」としての客観的に物事を見る視点を与えること。その一方で、日本が過去において犯してきた加害事実と向き合い、行動をうながすきっかけ作りにある。訪問者が受け止め、考えるための「淡々としたガイド」だということである。これは、訪問者が、N氏のガイドを受けることで、少なからず継承者として次世代へ伝えていくバトンを受け取ったと言える。小さな差別から積み重なってきたアウシュビッツの悲劇だということを自分事として、日常を見直すことにつながれば、それはある種の継承者になったと言えるであろう。

3) まとめ

悲劇の継承とダークツーリズムの役割について議論をしてきた。悲劇の継承は当事者と共にその支援をする第三者を含めた「関係者」の形成を進めることがカギとなる。第三者の興味を惹く一つの方策として、ダークツーリズムが重要な役割を果たしていた。ダークツーリズムとして悲劇の地を訪問する中で、当事者と出会い、そこで起きた悲劇に触れることで、次なる行動へと導くきっかけを与えていた。

その際の語りにおいて、過去の悲劇的な出来事ではなく、いまもある「日常」が悲劇により奪われたという視点が重要である。「日常」を起点とした発想が、訪問者（第三者）に自分事として受け止めてもらうことにつながる。これにより第三者が次の伝承者になる可能性が生み出され、時間の経過により当事者が失われても、次世代への継承につながっていく。

当事者が失われた後、第三者による継承においては、アウシュビッツ強制収容所ガイドN氏のように、感情に訴えかけると言うよりも、冷静な語りにより多くの人びとに悲劇を受け入れてもらう方策が重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高木亨	4. 巻 2019年度
2. 論文標題 被災地にある大学だからできる支援例～熊本学園大学ボランティアセンターの活動から.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 (一財)私学研修福祉会・日本私立大学協会 2019年度(第65回)学生生活指導主務者研修会報告書	6. 最初と最後の頁 118 - 133
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木亨	4. 巻 73
2. 論文標題 熊本学園大学ボランティアセンターの仕事	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 くまもと わたしたちの福祉	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木亨	4. 巻 53
2. 論文標題 福祉環境学入門 水俣現地研修	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 水俣学通信	6. 最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 23
2. 論文標題 経路依存性とダークツーリズム ～進化経済地理学の観光学への応用を目指して～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 進化経済学会論集	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 34
2. 論文標題 ダークツーリズムと世界遺産(最終回)"復興のデザイン"と世界遺産	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kotoba	6. 最初と最後の頁 184-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 33
2. 論文標題 ダークツーリズムでアプローチする高度科学技術社会の新局面	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集 Proceedings of JITR annual conference	6. 最初と最後の頁 353-356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 32
2. 論文標題 ダークツーリズムと世界遺産(第3回)「島」の悲劇性を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kotoba	6. 最初と最後の頁 168-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 32
2. 論文標題 ダークツーリズムと世界遺産(第2回)産業遺産の光と影：軍艦島、オーストラリア囚人遺跡群、石見銀山	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kotoba	6. 最初と最後の頁 156-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出明	4. 巻 31
2. 論文標題 ダークツーリズムと世界遺産(第1回)アウシュヴィッツとクラクフから考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kotoba	6. 最初と最後の頁 134-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出 明, 呉座 勇一	4. 巻 720
2. 論文標題 対談 歴史と現代を捉える新たな視座。(二〇一九年: 世界と日本のゆくえ)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 潮	6. 最初と最後の頁 56-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出 明	4. 巻 24
2. 論文標題 科学研究費挑戦的萌芽研究特設領域における「ダークツーリズムで観る高度科学技術社会の新局面」のインパクト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 進化経済学会論集	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 IDE AKIRA	4. 巻 2021
2. 論文標題 Use of Contact Tracing Apps to Promote Tourism under COVID-19	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 IADIS e-Society	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 被災地にある大学だからできる支援例～熊本学園大学ボランティアセンターの活動から．
3. 学会等名 （一財）私学研修福祉会・日本私立大学協会 2019年度（第65回）学生生活指導主務者研修会 第3日目 7. 事例発表．（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 地域は回る～田中啓爾の地位層と歴史の重層性～．
3. 学会等名 令和元年度 熊本学園大学秋期公開講座 有為転変～様々な「循環」を考える．（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木亨（セッションコンピナー）
2. 発表標題 地域共生のまちづくり～復興従事者との共生～
3. 学会等名 第5回国際フォーラム（広野町）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井出明
2. 発表標題 「北陸学」の構想とその可能性
3. 学会等名 進化経済学会第23回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira IDE
2. 発表標題 Ghost and Dark Tourism
3. 学会等名 The Aesthetics of Decay (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井出明
2. 発表標題 科学技術系博物館は如何に誤謬を扱うべきなのか？ 方法論としてのダークツーリズムの拡張的応用
3. 学会等名 アートマネジメント学会第20回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井出明
2. 発表標題 ダークツーリズムと地域社会 震災遺構と地域の復興
3. 学会等名 地域デザイン学会第7回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 記憶の継承・満洲大日向村訪問とその意味
3. 学会等名 令和3年度佐久穂町公民館主催 第1回文化芸術講座(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 熊本学園大学のボランティアの状況
3. 学会等名 Gakuvuオンラインセミナーコロナ禍での学生災害ボラ－熊本の2大学に聞く会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 熊本県における特別養護老人ホームの立地と災害について
3. 学会等名 2020年度日本地理学会秋季学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 北陸の醤油 甘いかしょっぱいか
3. 学会等名 進化経済学会観光研究部会 第44回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木亨
2. 発表標題 災害後の復興過程－支援のあり方を通じて考える
3. 学会等名 吉備地方文化研究所シンポジウム「災害と地理学」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井出明・高木亨
2. 発表標題 ダークツーリズムを援用した災禍の継承
3. 学会等名 2021年進化経済学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井出明
2. 発表標題 COVID-19以後の観光学
3. 学会等名 観光学術学会2020年度研究報告
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井出明
2. 発表標題 COVID-19後の社会科学
3. 学会等名 地域安全学会2020
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 舒蘭会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 報告書	5. 総ページ数 107
3. 書名 『舒蘭会日中友好訪問団の記録』報告書	

1. 著者名 白坂 蕃、稲垣 勉、小沢 健市、古賀 学、山下 晋司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 464
3. 書名 観光の事典	

1. 著者名 長嶋俊介編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 480
3. 書名 別冊『環』25号 『日本ネシア論』	

1. 著者名 牧瀬稔編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京法令出版	5. 総ページ数 326
3. 書名 地域ブランドとシティプロモーション	

1. 著者名 平岡 昭利、須山 聡、宮内 久光	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 192
3. 書名 図説 日本の島	

1. 著者名 井出 明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 幻冬舎	5. 総ページ数 237
3. 書名 ダークツーリズム : 悲しみの記憶を巡る旅	

1. 著者名 井出明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 美術出版社	5. 総ページ数 200
3. 書名 ダークツーリズム拡張	

1. 著者名 井出明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 メディアボーイ	5. 総ページ数 95
3. 書名 真実の潜伏キリシタン関連遺産 : 残酷な歴史を見つめる	

1. 著者名 井出 明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文藝春秋	5. 総ページ数 224
3. 書名 悲劇の世界遺産 ダークツーリズムから見た世界	

1. 著者名 山川 充夫、初澤 敏生	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八潮社	5. 総ページ数 488
3. 書名 福島復興学	

1. 著者名 吉原直樹・山川充夫・清水亮・松本行真編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六花出版	5. 総ページ数 850
3. 書名 東日本大震災と 自立・支援 の生活記録	

1. 著者名 松井 秀郎、二宮書店	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 232
3. 書名 1964年と2020年 くらべて楽しむ地図帳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井出 明 (IDE Akira) (80341585)	金沢大学・GS教育系・准教授 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------